

論文審査の結果の要旨

報告番号	甲 第 1127 号	氏 名	村 中 太
論文審査担当者	主 査 菅 野 祐 幸 副 査 佐 々 木 克 典 ・ 田 中 榮 司		

(論文審査の結果の要旨)

これまで肛門管移行帯上皮は重層円柱上皮で、形態的には結腸・直腸型円柱上皮から扁平上皮への移行過程の上皮と考えられてきた。また、肛門管を構成する上皮の多彩性から、肛門管には多彩な腫瘍が発生し、直腸原発腫瘍との鑑別が必要となる。肛門管発生の腫瘍組織診断と組織発生の理解に必要な肛門管上皮および肛門腺の組織構造と免疫表現型を明らかにするためヒトと肛門腺が発達しているブタにおける比較免疫組織学的検討を行った。

典型的な肛門移行帯および肛門腺の含まれるヒト 15 例、ブタ 2 例を用いて免疫染色を行い検討した。免疫染色はムチン (MUC : MUC2、MUC5AC、MUC5B)、Desmoglein3、p63、CDX2、SOX2、および α -平滑筋アクチン (α -SMA) について検討を行った。

その結果、村中 太は次の結論を得た。

- 1) 移行帯部の粘液細胞は大腸杯細胞とは別系統の細胞であること、またこれらの粘液細胞は同部の扁平上皮細胞と同一の幹細胞から発生していることが推測された。
- 2) 移行帯部の粘膜の重層上皮は移行上皮と異なり扁平上皮で構成されていること。
- 3) ヒト肛門腺に存在する粘液細胞には 2 系統の粘液細胞が存在すること。一つは導管上皮の表面を被覆した表層粘液細胞 (移行帯粘膜上皮の表面を被覆した粘液細胞と同系列の細胞) で、もう一つは腺を構成する腺粘液細胞である。また、肛門腺の腺細胞は *intaraepithelial gland* ないしは *para epithelial gland* を形成して存在する。
- 4) 移行帯粘膜上皮と肛門腺には SOX2 が発現しており、これらの領域発生の腫瘍の診断マーカーとして利用できる可能性がある。

これらの結果より、肛門移行帯上皮は形態的には直腸円柱上皮から肛門皮膚への移行過程の上皮であり、表層の粘液細胞は直腸の杯細胞と理解されてきたが、肛門移行帯上皮は直腸円柱上皮から肛門皮膚への移行過程の上皮とは異なる上皮であることがわかった。肛門移行帯上皮の表層粘液細胞は直腸杯細胞とは異なった免疫表現型を示すことから、直腸原発腫瘍と直腸移行帯粘膜・肛門腺原発腫瘍の鑑別への応用が期待される。

よって、主査、副査は一致して本論文を学位論文として価値があるものと認めた。